

令和4年度 修了式

「日本の中高生が 世界の中で 果たすべき役割」

令和5年3月20日（月）

輝翔館中等教育学校 校長 山口英明

校長式辞

「日本の中高生が世界の中で果たす役割」

令和5年3月20日（月）

修了式

校長 山口英明

3月1日に卒業式が終わりました。今年の本校の卒業式は、厳粛な雰囲気、温かな余韻のある、実に立派な卒業式でした。私もいろいろな卒業式を見てきましたが、生徒一人一人の卒業式に臨むしっかりとした気持ちが随所に表れていた、まさに最高レベルの卒業式だったと言えます。

この写真を見てください。卒業証書授与の場面ですが、卒業生総代である栗原さんの指先まで神経の行き届いた落ち着いた所作。総代にふさわしい見事な態度でした。そして、在校生を代表した5年生荊尾君の送辞、6年生竹下君の答辞、6年生黒岩君の記念品贈呈。3人とも実に堂々とした態度であり、大いなる存在感に溢れていました。また、今年6年生は、今までで最も多くの輝翔館賞や奨励賞を受賞するなどの活躍を見せてくれた学年でした。後輩の皆さんも是非先輩に続いてもらいたいと思います。

式の間、保護者席で人目をはばからず、涙を流されていた父親の姿が目に入り、思わず胸が熱くなりました。卒業生は6年間の思い出を振り返りますが、子供を一人前にした家族はこれまでの18年を振り返って涙されます。卒業式は高校生にとって最大の親孝行の場でもあるということです。後日、担任の先生方からは、式後のHRでは、卒業生一人一人が保護者の前で自分の気持ちを述べていたと伺いました。「自分一人の力ではなく、多くの人に支えられて卒業証書をもることができた」と何人もの卒業生が、家族に、友達に、先生に感謝の言葉を立派に述べていたそうです。

改めて、こうして写真を見てみると、輝翔館の生徒は立ち居振る舞いが実に美しいことがわかります。5年生も含めて、長い式の間でも視線が下がらず、指先、つま先がピシッと揃えられているのは、決してその場限りのものではなく、日頃の授業態度や行動意識によって会得したものでしょう。感謝の気持ちを伝えることのできる素直さとあわせて、社会に出て通じる「美德」は、本校の伝統として受け継ぎ、皆でさらにレベルを上げてもらいたいと思います。

さて、世間を騒がせている、迷惑行為を撮影した動画拡散問題について少し触れておきたいと思います。回転寿司チェーン店で醤油ボトルをなめるなどの行為をした少年及び撮影した関係者について、警察は偽計業務妨害の疑いで書類送検する方針とのことです。

このような愚かな行為は、日本では10年前にも起きていて、軽はずみにネットに挙げた情報が大学や企業に知れることとなり、停学処分を受けたり、就職取消しになったりしたことが社会問題となり、「バカッター」という言葉が流行しました。

今回、被害にあった会社では、客側からの謝罪を受けた後も「刑事、民事の両面から厳正に対処」と発表しましたが、これは「謝罪だけでは許さない」という非常に厳しい対応です。他の飲食店でも厳然たる対応をする方向で、迷惑行為によって、従業員の電話対応や予防策への対応、株価の下落まで、会社側からすると相当な被害金額になるため、たとえ、軽はずみで撮影したとしても、多額の損害賠償責任が問われることとなります。

ヨーロッパ等では、個人情報について、過去に不用意に挙げたネット上の写真や個人情報がAIによって統合され、莫大なデータとして蓄積されつつあるそうです。道を歩いて防犯カメラに映っただけで、その個人の名前、住所、連絡先、学歴、趣味までもが瞬時にわかるようになり、AIによるその情報集積量は「あなたはコンビニのアルバイトをしたいと思います」と3日前に面接試験を受けましたね」というレベルにまでできているということです。つまり、軽い気持ちでネットに挙げた動画や写真が一生付きまとうようになると警鐘が鳴らされています。そのようなこれからのネット社会に対応するためには、「良識」を大切にして、慎重に行動すること、自己コントロールする力が大切だと、皆さんも肝に銘じておいてください。

さて、ちょうど一年前、今年の今頃、世界が注目を集めたこれらの本のことを覚えているでしょうか。通称「ウイグル問題」と言われますが、昨年2月から北京で行われた冬季

オリンピック・パラリンピックが開催された際に、アメリカのバイデン大統領が政府関係者を開会式等に派遣しない「外交的ボイコット」を表明し、日本も政府関係者を派遣しないことを遅れて発表しました。大統領は、もともと人権重視を掲げていて、この「外交的ボイコット」は、中国の新疆（しんきょう）ウイグル自治区に関して人権侵害が続いていることに対する抗議だと主張しました。「新疆（しんきょう）」とは新しい土地、「自治区」とは漢民族以外で人口の多い民族に認められた名称で、ウイグル自治区のほか、中国にはチベット、内モンゴルなど5つの自治区があります。近年、この地域に石油や天然ガスなどの豊富な地下資源が見つかり、かつてこの地が独立の経験を持つ（1933～1934年、第1次東トルキスタン共和国）地であることから、中国共産党が100万人以上のウイグル人を強制収容所に送るなど弾圧的支配を強めていると言われています。

オリンピック憲章では、「このオリンピック憲章の定める権利および自由は、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。」「スポーツと選手を政治的または商業的に不適切に利用することに反対する」ことを明確に示しています。また、オリンピックの理念や歴史に詳しい中京大学の來田（らいた）享子教授は「女性の参加を求めることや、ユダヤ人差別やアパルトヘイト政策への抗議など、オリンピックの歴史と人権侵害を理由にしたボイコットとの関わりは深い」と指摘しています。

世界の歴史を紐解いてみると、国際舞台の場で人権問題を明確に主張し、人種差別への戦いを挑んだのは1919年のパリ講和会議における日本代表が世界で最初です。当時、ヨーロッパの科学者による「科学的人種主義」によって、日本人を含めた有色人種に対してあからさまな差別がごく当然のようにされていました。大正8年（1919年）、日本は第一次大戦後のパリ講和会議において、ウィルソン大統領の提唱する国際連盟の構築こそ、人種平等を確立する絶好の機会だと考えました。なぜなら、この写真にあるように、アメリカのカリフォルニア州では、優秀で勤勉な労働者としての日本人移民を様々な法律で排斥し、何の罪のない子供たちまでも公立小学校から追放されていました。日本は有色人種の先頭に立って、断固として世界の人種差別撤廃に挑まなければならない状況にあったわけです。

同年のパリ講和会議の国際連盟委員会において、日本を代表して演説をしたのは、明治維新の功労者大久保利通の次男である牧野伸頭（まきののぶあき）でした。彼は「国際連盟規約」中に人種差別の撤廃を明記するべきという提案を行い、圧倒的支持を得ることができましたが、議長のアメリカ大統領ウィルソンに、全会一致でないからといって否決されてしまいました。この世界で初めての日本の人種差別撤廃条項の提案とその失敗は、インドネシア、インド、エジプト、チュニジアなど世界各地における独立運動を刺激したと言われています。世界で最初に国際会議の場で人権問題を明確に主張した日本、世界で唯一の被爆国である日本が、人権問題や核廃絶に向けて世界の中で果たすべき役割はとても大きいものがあります。皆さんのような若者が、自分に身近なことから「今世界で何が起きているのか」「歴史は何を物語るのか」を考えることが、これからの未来を創る責務であると思います。輝翔館の生徒として、世界情勢に目をそらさず、このような世界の歴史に関心を持つことを大切にしてください。

今日は「日本の中高生が世界の中で果たすべき役割」というテーマで話をしました。

最後に、日本を含めた7カ国の満13～29歳の若者を対象とした意識調査の結果を見てください。「自分自身に満足している」は7か国中最下位、「自分には長所がある」も最下位、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」も最下位、しかし、意外にも「自国のために役に立つようなことをしたい」は7か国中1位でした。すなわち、日本の若者だって、まだまだ捨てたものではないのです。

1984年、今から約40年前に、アフリカで大飢饉が起こったときに、イギリスではイギリスとアイルランドの音楽界のスーパースターのチャリティー・プロジェクト「バンドエイド」が結成され、「Do They Know It's Christmas?」という楽曲を提供しました。

翌年には、アメリカ音楽界のスーパースターのプロジェクト「USA for AFRICA」が皆さんもよく知っている「We Are The World」で一世を風靡しました。本校の吹奏楽部が、大事に演奏し続けているこの曲は、例年卒業式の退場の曲にも選ばれています。「黒木から全国へ」。本校が目指すグローバル精神の象徴のようなこの曲を、いつか全校生徒で歌えたらいいと思っています。

いよいよ4月からは、新入生が入学してきます。上級生として、精一杯頑張っている姿を後輩に見せることができるよう充実した春休みを過ごしてください。